

黃昏記

黄昏記 — 回想の川田順 — 鈴鹿俊

短歌新聞社

黄 昏 記 回想の川田順

昭和58年10月25日発行

著 者 鈴 鹿 俊 子

発 行 者 石 黒 清 介

印 刷 所 有 限 会 社 ニ ッ カ

発 行 所 短 歌 新 聞 社

〒166 東京都杉並区高円寺南4-43-9
振替口座東京5-21683 番
電 話 (03) 312-9185

1092-000247-4362

定価 2500 円

目 次

I

香合展にて……………	八
東慶寺と私……………	二〇
西田幾多郎博士の短歌……………	二七
細香の旧居を訪ねて……………	三四
富士裾野建碑の記……………	三九
遊行寺建碑について……………	四七
詩碑の石について……………	五三
法善寺横町と洛西、勝持寺……………	五七
円珠庵にて……………	六二
上の山・晚翠草堂……………	六五
白蓮女史追憶……………	六九

II

3 目 次

Ⅲ

信綱先生と順	七六
英一先生のこと	八五
若山喜志子先生追悼	八九
追憶の初井しづ枝女史	九二
鈴江幸太郎氏の全歌集を手にして	九七

Ⅳ

篤二郎と順	一〇四
-------	-----

Ⅴ

鳥羽の竹田にて	一三二
かごしまと順	一六六

VI

シェークスピアと順	一七八
定家の掛軸	一八六
国府津の思い出	一九二
その時々回想	一九九
私の南薩記	二三〇
集のあとに	二四五

黄 昏 記

—— 回想の川田順 ——

香合展にて

昭和五十三年の夏（一九七八年）私は、日本の小さな焼物の「香合」を集めた「珠玉の香合展」が、東京で開催されていることを知り、暑い中をTデパートの会場まで出かけた。焼物は好きだが、専門的な知識があるわけでもなく、余程の場合以外は、わざわざ見に行く私ではなかったが、その時は何かしらひきつけられるような気持で、出かけて行ったのだった。

その香合展は、第一次大戦終結の時、フランスの首相として、ベルサイユ条約に調印したジョルジュ・クレマンソー（一八四一年—一九二九年）のコレクション三千五百点の中から、六百点が並べられているのであった。クレマンソーのコレクションであるところに私が出かけて行った理由があった。

八階の会場に入ると大変な人で、陳列ケースの前は人々の列でうめられていた。列のあとにつづいて一つ一つじっくり観るなどということは到底出来なかった。私は人々のうしろから覗いたりしながら、あちこちしていたが、時間をかけている間には意外に人の列がすぐこともあって、ガラスケースの側へ寄って行き、近々と観る。それらの香合を見ると私は香かな日にかよった北

野神社近くの西方尼寺の茶室を思い出す。そこで稽古の都度手にした、香合の織部焼や萩焼その他、いま眼の前にあるのと重なりあつて私には眺められるのだった。それにしてもここで見てゐるそれ等小さな焼物の好ましき、例えば織部や備前の渋い茶や緑の、花びらが器全体に被いかぶさっているの等、百年以上も前に作られたものとも思えない斬新なデザインで、私は暫くその前が離れられない。このような掌の上にのせられるものも、無限のひろがりをもつことを感じさせられた。中でも女の私ごとひきつけられたのは、色絵糸巻、染付貝、色絵団扇等であつた。糸巻は薄茶の地に朱と茶の糸が十文字に巻かれているかたちで、薄く如何にも木製の糸巻を思わせた。また塗付貝は藍でうずまきが描かれ、それぞれの感じが心憎いまでに表現されている。香を入れる蓋と身に分れている器でありながら、薄く何という繊細さであらう。作者は真清水蔵六と書かれていた。

その六百点近い小さな焼物は、江戸時代後期から明治初期にかけての作品が大部分ということで、日本各地の窯場別に並べられていた。京都を中心とした関西、備前、萩、九州の北と南、北陸の九谷その他であつた。何げないものも多かったが、あまり区別をつけず、また作品の収めていた箱が、全部除去されていたということ等、外国人らしい収集方法であると思つた。クレマンソーは、純粹に作品そのものを、公平な立場で愛したらしい。日本で茶の湯の道具として使われる場合、特に名品の場合は箱が大変重要なのだが、それは箱が作者の自家製であつたり、またそ

の箱に製作年代などを明記するからである。

私は会場内をあちこちしながら、作者不明のものが多く中に、仁清、乾山、道八等の名前が附されていると、やはり改めて見直したりした。けれども私は陶器についてそんなに詳しいことはわからない。場内には茶の湯の師匠や、陶器の専門家らしい人等が一つ一つ眺めながら、窯場や陶工の名を言っているのが、私の耳にも入ってくる。そのような声をきくとこの展覧にはふさわしくないようにも思えるのだった。私がふと人のまばらなケースの前に行き、ガラスの中を見ると、そこに色紙香合が置かれていて、蓋が少しずらしてあるのはそれだけであった。金泥で色紙のように模様を描いた上には和歌が書いてあり、身の方の内部は朱と金でもみじの散っているのが見られた。好ききらいは別として何という凝りようであろうか。

私は一巡して、かたちの種類の多いことにも驚き、又引かえしたりしていた。例えば亀、とぐろを巻いた巳（へび）、扇面、ひょうたん、御多福の人形等で、一つ一つはなして見るのとはちがった、数による重厚さを感じた。そんな中に小鳥の形をしたものもかなりあって、それらはみな可憐であった。とふと眼についた染付の小鳥の前に立った時、「オヤッ」と思い、寄って行って角度を変えて眺めたが、やはり同じだと思った。順から貰った香合にそっくりではないか。香合展があると知った時、私の心の底ではひょっとしたらという思いもなかったが、それが現実となって眼の前に同じものがあるのだ。私は夢のような気持で会場の出口に来ると、そこ

に売っていた「珠玉の香合」というぶあつい写真集を求め、急いで湘南電車に乗り、辻堂の家へ帰った。そしてしまつてあつた香合の箱を出し、中の小鳥を出して机の上に置いた。

写真集には百三十点程の作品が、カラー図版で出て居り、そのあとに全部の出品目録があつて、一つ一つの写真が実物よりやや小ぶりだが、はっきりわかるように出ていた。それぞれその焼物の説明や、銘のあるものはその写真も出ているので一目瞭然である。私は眼の前にある小鳥と同じのがある頁をあけて、両方をてらし合せて見た。やはり間違いない。同時に同じ窯で焼かれたものである。それにしても三千五百点の中の六百点のうちにこの一点が入つて、はるばる里帰りしたということに、陶器の運命のようなものを感じた。兄弟の一つは遠くフランスに渡り、クレマンソーの手に触れたりして愛玩され、翁の死後十年も経て、大西洋を渡りカナダへと数奇な運命をたどつたのだ。そしてそこでもまた二十年間も目の目を見ず、箱の中に眠り、港の倉庫に放置されていたという。弟分の方は、順の手に渡るまではわからないにしても、その後の三十年間を、私たちと共にあつたのだから、平板なすぎゆきとも思えず、私にしてみればいとおしい。

眼の前の陶器の小鳥をじつと眺めると、薄く、如何にもやわらかな羽根のような尾をびんと上方にはね、両翼もふんわりとより上り、藍をほどこした上に白で細く線が描かれている。嘴と頭部も藍で、それがうしろへ疎らにながしてある。口をちよつとあけているのも可愛いく、目には小さな黒い玉が入れてあつて光っているので、生きているかと思ふ。手に持つて底を見ると、

細い足がくっついて作られていた。私が正面から眺めようとした時、黒い眼の右方が少しずれているのに気がついた。おかしいと思い尾を右に回したりして、目の両方が見える斜めの位置にした時、成程これでよいのだと思った。何といふ神経のゆきとどいた細やかさであるう。目はわざとずらせてあったのだ。

この香合を最初みた時、雀のようだったが、イヤチがう、みそさざいだと私は思うことにした。それには理由があるのだ。昭和二十三年の秋、母の家に帰っていた私は、置いて来た子供たちのことを思うと、いても立ってもいられない気持で日々を送っていた。そんな私を何とか慰めようと順は或る日、「一度奈良へ行こうじゃないか、橿原に親友がいるのでそこへ行つて、帰りに斑鳩のあたりを歩こうじゃないか、秋の今頃はきっといいよ」と誘って下さった。一緒に奈良を歩くなどということは、思ってもいなかったもので、私はいそいそとついて行つた。橿原の親友というのは歌人の辰巳利文さんであつた。順が私をつれて行つたので驚かれたらしいが、夫妻で歓迎され、その夜は泊めていただいた。翌日辰巳さんと三人で、飛鳥川のほとりを歩いたり、安居院の大仏さまを拜んだりした後、辰巳さんとわかれて、法隆寺から薬師寺等を順と歩いた。最後に行つた唐招提寺のあの美しい大屋根の鴟尾に、可憐な小鳥がびんと尾をはねて止つていた。順はそれを眼ざとく見つけると、「ご覧よ、かわいいね、きつとみそさざいだよ」と言われた。

その奈良ゆきのあとであつた。順が十センチ四方の漆で塗った木箱を持って来て、私の前で紐

をほだき、小鳥のかたちをしたものを取り出し、掌にのせて「かわいいだろう、みてご覧、これ君にあげる」と置いて行かれた。それがこの染付の香合であった。

クレマンソーは、どのようなきっかけから日本の香合を集めたのであろうか。モネと親しかったというが、そのことをもう少し詳しく知りたく、私は世界美術全集「モネ」の頁をくついで、ある頁で成程と思った。それはモネのジヴェルニーの邸内の池にかけてある、日本風の太鼓橋の上に立っている、クレマンソーとモネの写真を見たからであった。二人の頭上には、藤が豊かな花を垂れ、下方には菖蒲など見られた。

クロード・モネ（一八四〇年—一九二六年）はジヴェルニーに借りて住んでいた土地が気に入り、一八九〇年に家と共にそこを買いとり、日本風の庭園を作るため池を掘り、睡蓮を植えた。そして囲りにはしだれ柳、竹、藤、菖蒲等も植えさせた。これ等の仲介をしたのは、当時パリにあって、浮世絵等の仲介をしていた林忠正がいたし、松方幸二郎とものに親しかった。

モネの絵の写真を見てゆくと、「ラ・ジャポネーズ」（日本娘）というのに出あった。赤い日本の着物を着た女性が、扇子を持ちポーズしたもので、バックには団扇が十数本も散らしてあり、床には日本の花菱草が敷かれている。美しく金糸で刺繍をしたらしい朱色の着物の、下部の大きな模様は、武士らしい異様な人物が、さしている刀に手をかけ、眼をむいている。モデルになっ

てこの着物をきているのは先に亡くなったモネ夫人カミーユであるという。この絵を日本人の私が見ると、どこかぎごちないところがあるように、思われるのだが、一度も日本に来たことのないモネが、これだけの大作を描き、第二回印象派展に出品したということは、よほどの関心を日本に持っていた証拠である。

「私が睡蓮を植えたのは楽しみのためであり、これを描こうなどとは思いませんでした。……そして突如として、私の池の妖精たちが、私の眼前にあらわれ出た。私はパレットを取りあげた……この時以来、ほとんど私は他のモデルをつかうことがなかった。」とモネは睡蓮に関して述懐している。

セザンヌ、ロダン、クレマンソー等の友人が訪れ、この池のほとりを歩いた。そのモネの応接間は、日本風に飾られ、広重その他の浮世絵が掲げられていたという。クレマンソーはここを訪れ、彼等と交わることで、日本人の美の創造に対するすぐれた資質をくみとったにちがいない。東洋美術の展覧等で、クレマンソーがはからずも眼にした、日本の香合の、可愛らしさにひかれ、「これを集めよう」と思ったのではないだろうか。そしてあらゆる方法で集めたのだろうか。れど、日本での収集は、明治二十三年（一八九〇年）頃からで、結果的にはやはり日本で集めたものが、大半をしめているらしい。当時の横浜フランス領事館員ステナケルに依頼した。掌の中におさまる小形のものばかりを、というのがクレマンソーの希望であった。それも名品だけを集